幕末生徒会トライアルヴァージョン１、０

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幕末生徒会トライアルヴァージョン１、０

【Ｎコード】
Ｎ２３６３Ｊ

【作者名】
ｋａｊｉ

【あらすじ】
慶応４年の戊辰戦争の謎の大逆転により徳川幕府は政権を取り戻していた。だが西洋からの圧迫には耐えられず仕方なく幕府は西洋のものや思想を入れることになった。そんな現代。
俺は徳川が作った学校で独自の路線を歩んでいた。友人とＴＹＣを設立して今日も楽しくすごしていた。そんなある日俺の人生を変えるある出来事が……。

「父の仇いいいい！」

白い鉢巻に白装束に身を包んだ少女と白い鉢巻をした学生服姿の男が校門から出ようとしていた学生服の男に突進して行った。白い鉢巻の男が学生服の男の背後にすばやく回り両手を後ろから掴んでがっしりとロックした。

「お。おい。何をする」

「今だ。りょうこちゃん。心の臓を貫け」

「父の仇いいいい！！」

手には小刀を持ちその小刀が学生服の男に深々と突き刺さって行った。

「な。なんだあ。ぐあああああ」

しばらくすると制服姿の男はぐったりとして両手をロックしていた白い鉢巻姿の男はそのぐったりとした男を地面に捨てた。影から見守っていた俺は終了を確認すると近寄った。

「達也殿。父上の仇は取りました」

「陸奥殿。よくぞやった。父上もお喜びになると思うぞ」

「りょうこちゃん。いいダッシュでござったざった。あのスピードならＤＦの隙を狙ってスペースに入り込める」

俺たちは本懐を遂げてお互いを褒め称えた。その間に先ほどまでぐったりとしていた男が起き上がってきた。

「ぐぐぐ。生きてる……」
「ああ。ごめん。ごめんご協力ありがとう」
「なんだ。ＴＹＣかよ。いい加減にしろよな」

男は少し怒りながら埃を払って去って行った。まあもうこの学校では見慣れた光景なので学生服の男もしょうがないなくらいにしか思っていないだろう。

「怒られちゃったね。カシャカシャ」
「まあ。楽しかったし。まあいいだろ」
「お前はそれしかねえのかよ。まあいいけどよ」

そう言いながらりょうこは先ほどのおもちゃの小刀の部分の引っ込む部分を押して遊んでいた。俺は次なるターゲットを探していた。もっと面白そうなリアクションが取れるようなやつはいないのかなあ。

慶応４年の戊辰戦争の謎の大逆転により徳川幕府は政権を取り戻していた。だが西洋からの圧迫には耐えられず仕方なく幕府は西洋のものや思想を入れることになった。そんな現代。今では幕府の制度は無くなり議会制へと移行したが今でもニュースで徳川家の子孫と維新獅子の子孫が激戦を繰り広げている。世界大戦前はよく小競り合いがあったが今では激戦が激論に変わり一応の日の目を見ていた。

俺の通う徳川高校は徳川家が優秀な人材を広く育成するために設立した学校で今でも殆どが名門の出の子女が多く通っている。

俺は別に名門の出でも何でも無いのだが兄への反発心から独自の路線を歩んでいる。自分で言うことでもないが。その一環として友人Ａと友人Ｂとで楽しくやろうクラブ、通称ＴＹＣを設立した。もちろん生徒会非公認のクラブだがお金をかけずに楽しくやっている。

「うんじゃあ。次の獲物を探そっか。キョロキョロ」

と言いながらりょうこはショートカットの茶色の髪を揺らしながら辺りをキョロキョロと見回した。俺の親友の1人陸奥りょうこ（むつりょうこ）。この子はアホの子だがほんわかとした雰囲気を持っていて誰からも愛されるキャラだ。俺もこいつがある程度のアホなことをやっても許せるかなと思っている。

「もうちょっとリアクションのいいやつはいねえのかよ。つまんねえよなあ。これなら帰ってサッカーでも見てればよかったぜ」

俺の親友2こと劣化イケメンの中岡進次郎（なかおかしんじろう）が何かのステップを踏んでいた。クライフターンか？　まあそれはいいとしてこいつはただのスポーツ馬鹿だ。高校に上がる前は3，4つクラブを掛け持ちして成績を収めていたがひざを壊してからはただのうるさいスポーツ批評家に成り下がった。毎日スポーツの話ばかりされて最近は少々うんざりしていた。

「あ。会長さんだ。珍しいね。一人で歩いている」

「ああ。そうだな。珍しいな」

アホの子のりょうこの見ている方向を見ると会長の徳川美桜（とくがわみお）がとぼとぼと歩いていた。徳川美桜、徳川高校の第1生徒会の会長にして現首相徳川義輝（とくがわよしてる）の娘、兄は官僚で元はここの生徒会の会長をしていた。俺も昔はよく遊んでいたが大きくなるにつれて段々と疎遠になってきて今では殆ど話すことがない。ロングの黒髪を優雅に揺らしていつもは優雅に取り巻きを何人か連れて歩いているが今日はどうやら1人のようだ。それになんだか今日は元気がなさそうだ。

「よし！　決めた。次は会長さんだ」
「おい。待て！」
俺が止めるよりも先にりょうこはすばやく走り出して美桜会長に向かって行った。りょうこは素早く移動しながらできるだけ物音を立てずに会長の後ろに回り込んだ。どうやら会長は何か考え事をしているようでりょうこの接近には気づいていないようだった。
「父上の仇！　覚悟ぉ」
りょうこの両手で持った小刀のメッキがきらりと光り、美桜会長を突きさそうと腕を前に出した。
「痛！」
何かがぶつかる音がしたかと思うと美桜会長に小型が突き刺さる前にりょうこは右手を押さえて小刀を落とした。地面には小銭が1枚落ちていた。
「私の目の黒いうちは会長に手は出させませんよ」
声の聞こえる方を見ると見覚えのある1人の小さな少女が立っていた。
「兄さん。甘いね」
「なんだ。鳴海か。それに何回も言うが今はお前の兄さんじゃない」
少女はむっとした表情になると美桜会長の方に向かっていった。俺を兄さんと呼ぶこの少女は高橋鳴海（たかはしなるみ）と言って小さい頃に俺が養子に行った先にいた子で年が近かったので兄妹のように暮らしていた。

俺が高校に上がってから養子縁組を解消して1人暮らしを始めた。苗字も前の坂本に戻したので俺は鳴海とはもう他人なのだが未だに俺のことを兄さんと呼んでいる。

「会長大丈夫ですか？　お怪我はありませんか？」
「え？　何？」

どうやら会長は今の一部始終を気付いていないようだった。

「どうされたのですか？　ぼんやりして」
「別になんでもないの。ちょっと考え事していてね。ふう」

会長は大きなため息を吐くとまたとぼとぼと歩き出した。そうかと思うと急に振り返って俺たちを1人1人見定めるように見回した。いったい何だろうか。

「おい。りょうこ。美桜会長はどうしたんだ？」
「私は知らないよー。鳴ちゃんに聞いてみれば？」

俺と鳴海の関係を知っているりょうこは意地の悪い顔を俺に向けてきた。俺が兄さんと呼ぶなと言ったから鳴海は怒っているんだよなあ。少し話しかけづらかったがおどけながら聞いてみた。

「えー。鳴海さん何か知っておりますか？」
「知らない」

鳴海は俺にぶっきらぼうに言うとりょうこに近づいて美桜会長は第1生徒会のメンバーの選考に悩んでいるという話をした。4人までは決まっているのだがもう1人がなかなかいい人がいないらしくて決めかねているらしい。もちろん私はその1人に入っていると偉そ

うに語っていた。
　美桜会長はと言うとぼんやりしながら俺たちを見つめていた。俺が見かねて声を掛けようかと思ったら俺と視線が合った。美桜はうんうんと頷くとこんなことを言い出した。

「私に力を貸してくれませんか？」
「え？　俺。どういうこと？」

何を言うかと思ったら俺に力を貸してくれと言ってきた。さっきの鳴海の話から推測すると俺に第1生徒会のメンバーになってくれということだろうか。

「会長！　なぜ兄さんなのですか？　なんで？」
「前から考えていたけれど今決心した。5人目は坂本君で行く。もう決めた」
「いや。そう言われてもな」
「なんか面白そうジャン。やっちゃいなよ。ユー」
「そうだ。やれやれー」

俺が困っているとりょうこと進次郎は他人事だと思ってあおってきた。それと俺は兄さんじゃないからな。口に出して言うともっと怒りそうだから心の中で呟いておいた。

「鳴海ちゃんも坂本君にお願いして欲しいな。兄さん一生のお願いってね」
「そ。そんなこと言えないですよ。それに兄さんは……」
鳴海は語尾を濁すと俺をチラッと見てきた。
「いいじゃない。そうすれば大好きなお兄さんと一緒に居られるよ。

ほら名案。名案」
「ななな。何を言っているんですか？　会長」
鳴海はあたふたとしてよろけたかと思うと後ろを通りかかった女の子にぶつかった。
「ごめんなさい。って。げ！」
「何なの。あら。これはこれは第1生徒会の皆さんじゃないですか？」
俺の周りに緊張が走った。確かこいつは第2生徒会会長の大久保沙耶（おおくぼさや）だ。お付の桂隼人（かつらはやと）を伴って登場だ。この学校は創立者の意向で生徒会が2つあるのだが第1生徒会と第2生徒会は非常に仲が悪い。というか敵対関係にある。ちなみに第1生徒会は歴代徳川の人間が所属することが多かったので通称徳川会と呼ばれ、第2生徒会はそれに対抗して維新獅子会と呼ばれている。
「こんな所で何をしているの？　しかもぶつかって置いてその態度は何なの？」
「あんたには関係ないでしょ」
「謝りなさい！」
「……」
なかなか謝ろうとしない鳴海に切れた大久保さんは鳴海の左肩を強く掴んだ。その瞬間鳴海の眉がピクついたのが見えた。あ。こいつ切れたな。俺はとっさに止めようと声を掛けた。
「おい。鳴海。こんな所で止めろよ！」
「うるさい。兄さんは黙ってて！　私はこいつをぶっ飛ばす」

まずいなと思ったが俺にはもうここまで来たら止められなかった。なぜなら鳴海は昔から格闘技を習っていて今は創作武術部とかいう訳の分からないクラブに入っていてまあ平たく言うと強いのだ。誰か俺の代わりに止められる人はと探してみたが俺を抜かすと男は進次郎しかいない。進次郎を見ると急に右膝を抱えだした。うわ。こいつ。仮病を使いやがった。汚ねえ。

鳴海が空手の構えのようなポーズを取ると大久保さんの前にほっそりとした長身の眼鏡の男が立ちはだかった。大久保会長お付の桂隼人だ。

「ご先祖様の積年の恨みここで晴らしてやるわ。じゃあ隼人。後は任せたわ」

大久保会長は桂から一歩下がった。自分で戦わないのかよと突っ込みたかった。周りを見ると皆さんも同じような感想をお持ちのようで呆れていた。

任せられた桂は地面に落ちている木の枝を拾って構えた。鳴海も不服そうな顔をしていたがそれ以上に溜まった怒りを発散したいようで動き出した。

「もう誰でもいい。勝負。ふりゃあああ！」

なぜか喧嘩いや戦闘が始まってしまった。鳴海のキックの応酬に桂は木の枝でいなしている。桂の木の枝が折れると桂は素早く次の木の枝を拾って応戦していた。もうこうなったら誰にも止められない。どちらかが満足するまで続けるだろう。俺はもう付き合い切れないなと思いその場から離れようと思いみんなに声をかけた。

「おい。みんなこの場から離れるぞ。集まっていると色々とやばい」

「ああ。かもしんねえな」

「うん。分かった」
俺と進次郎とりょうこが離れようとしたが美桜会長はその場から離れようとしなかった。
「ほら。美桜会長も早く離れないと」
「でも鳴海ちゃんが……」
「あいつはアホですから大丈夫です。美桜会長が近くにいる方が危ない」
俺はもう面倒だと思い美桜会長の手を掴んで走った。後ろからは大久保会長の怒鳴り声が聞こえたが構わず走った。
しばらく黙って走って校舎の裏手の方まで来たのでここで休むことにした。
「はあ。はあ。ここまで来ればいいだろ」
「仲が悪いとは聞いていたがここまで悪いのかよ」
俺は普段、あまり運動はしないので思わず地面に座り込んでしまった。
「というより鳴ちゃんの強さにびっくりみたいな」
「まあな。あいつはアホだよ」
「可愛い妹ちゃんじゃないか。なんで捨てた！」
「捨てた訳じゃないよ」
「坂本君……いいですか？」
美桜会長は控えめに聞いてきた。目は真剣だった。また俺を生徒会のメンバーに入れる話だろう。

「ああ。いいけど」
「どうしてもお願いできませんか？　私これから始める戊辰選挙戦で負ける訳にはいかないんです！」
たぶん徳川美桜のいる第1生徒会と大久保沙耶のいる第2生徒会の対決の事を言っているのだろう。毎年この学校では第1生徒会の座をかけて生徒会同士のバトルが繰り広げられるのだ。たかが生徒会同士のお遊びのようなもののはずなのだが美桜会長がやけに必死になっているところが気になった。

「どういうこと何だ。どうしてそこまで必死なんだ」
「それは……すいません。言えません」
「言えない？　よく分からないのだが」
「すいません……」

美桜会長は小さく縮こまってしまった。言いたくないじゃなくて言えないと美桜会長は言っている。どういうことだろう。考えたが全く分からなかった。

「そうだ。こうするのはどうでしょう。坂本君のクラブを正式に生徒会で認めます。もちろん予算もつけます」
「その話乗ったぞ」
「私も乗ったー。これでエフェクターが買える。ジャラーン」
勝手に進次郎とりょうこが同意した。俺のＴＹＣに予算が付くのはうれしいがしかし美桜会長も思い切った手に出てきたな。それだけ必死なんだろうけども。美桜会長を見ると両手を目の前で組んでうれしそうにしている。参ったな。これは。
「これで決まりですね」

「待て！　待て！　俺はやるって言ってないぞ」
「まあまあ兄さん第１生徒会は楽しいですよ」
いつの間にか鳴海が背後にいた。見ると無傷だった。鳴海お前どっから沸いて出た。まだ戦闘中じゃなかったのかよ。
「それでは早速手続きをしないといけませんね。ではここにサインをお願いします」
鳴海は俺の手を掴んでボールペンを握らせようとしてきた。く。なんて力だ。これはまずい。
「だから待てって！」
「待ちなさい！　そんなこと許さないわよ。彼は維新志士党に入るんだからね」
大久保会長さんまで乱入してきた。息を切らしながら桂を引きずっていた。おいおい。鳴海さんよ。桂さん倒しちゃったの。
「待ってください。先にお願いしたのは私ですよ」
「先とかそんなことは関係ない。さあ私の所に来い！　悪いようにはしない。今ならえー。なんだ。桂頼む」
「坂本君。逆らったら分かっているだろうね」
桂さんは寝ながらの発言。白目剥いていますよ。早く病院に行った方がいいんじゃないですか。
「兄さん。断ったらご飯は煮干と牛乳にするからね」
「俺にどうしろって言うんだー。それと俺は兄さんじゃない！」

なぜか俺は第1生徒会に入るか、第2生徒会に入るかの決断をしなくてはならなくなっていた。この決断が俺の人生を大きく変えることになるとはこの時は思っていなかった。

（後書き）

ご拝読ありがとうございます。

時間ができたので頑張って書いてみました。一応連載にすると１話という所ですかね。キャラ数は多いですし設定は説明しないと行けないなどということがあってかなり難航しました。ちょっと説明文が多くて流れが悪い気もしますがこれからもうちょっと詰めていこうかと思います。

よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2363j/

幕末生徒会トライアルヴァージョン１、０

2010年10月21日09時18分発行